

ひろしの夢

バードストライク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クレしん小説です。

思い付いたから作ってみました。

よろしければ読んでください。

目次

ひろしの夢

1

ひろしの夢

『いってきません。』

『いってらっしゃい、父ちゃん。』

『たいたい。』

『いってらっしゃい、貴方。』

いつもの日常。

みさえ、しんのすけ、ひまわりの挨拶を受け俺は家を後にする。

今日も家族の為に頑張ることを決意し、仕事に向かった。

『いってきません。…みさえ。』

いつもの日常。

誰もいない、家に挨拶をした俺は家を後にする。

食べていくために頑張ることを決意し、仕事に向かった。

双葉商事に着いた俺は、思考を仕事モードに切り替える。

今の俺は係長の野原ひろしだ。

役職をもった社員として、下の社員を引っ張っていかなければならない。

給料はみさえから安いと言われるが、それでも家族を養うには十分な金額だ。家族を守るため今日も頑張らなくてはな。

双葉工場に着いた俺は、思考を仕事モードに切り替える。

今の俺は工員の野原ひろしだ。

工場に勤める工員として、社会の歯車にならなければならない。

給料は安い。みさえが給与明細を見たらなんというのだろうか？

それでも食べて行くために今日も頑張らなくてはな。

仕事が終わり今日もクタクタだった。電車に乗り、最寄り駅に向かう。

毎日のことだが、いまだに満員電車は慣れない。

そうしてるうちに最寄り駅に降りた俺は、家へと歩を進める。

夜闇に包まれた道を歩く距離は、朝よりも遠く感じて、正直とても辛い。

疲れた体に鞭を打ちながら、ようやく着いた我が家の扉をあける。

『ただいま。』

『おかえりなさい、貴方。』

『おかえり、父ちゃん。』

『たーい。』

この瞬間はいつも心地よく感じる。

家族に迎えられた俺は、家へと入っていった。

仕事が終わり今日もクタクタだった。電車に乗り、最寄り駅に向かう。

人の少ない時間になり、座席に座るのはもう慣れたものである。

夕日を受けた道を歩く距離は、最初は辛く感じたものだが、今は何も感じない。いつものように帰り、我が家の扉をあける。

『ただいま。』

この瞬間はいつも虚しさを覚える。

誰もいない家にただいまを言った俺は、家へと入っていった。

しんのすけとひまわりを風呂に入れるのは俺の役目だった。

いくら子供と言えど3人も入れれば狭く感じるものだが苦痛に思ったことはない。

むしろ、毎日の楽しみになっており、一人で入るよりも心が癒されるのだ。

風呂に入ったあとは、みさえの作った料理を家族で食べる。

とても暖かく感じて、つついビールがすすんでしまう。

ああ、幸せだなあ…

湯を貯めたあと、俺は風呂に入った。

一人が足を伸ばせるくらいのおおききなのに何故か広く感じて…

久々に浴槽に浸かったのだが、面倒だったただけだった。

いつも通り、シャワーにするべきだった。

風呂を出た俺は、コンビニ弁当をチンして食べる。

温めたはずの弁当は冷たく感じて、せっかく買ったビールも手が伸びなかった。

嗚呼、虚しいな。

食事が終わり少し経った後、俺はみさえに悩みを打ち明けることに決めた。

言ったところでどうにかなるものではないのだが、溜め込んでいても苦しくなるのだ。

『みさえ、話があるんだ。』

俺はみさえに声を掛けた。

食事が終わり少し経った後、俺はみさえに最近の出来事を打ち明けることに決めた。

言ったところでどうにかなるものではないのだが、どうしても伝えなかったのだ。

『みさえ、話があるんだ。』

俺はみさえの遺影に声を掛けた。

『最近、同じ夢を見るんだ。とても悲しい夢だった。夢の中の俺は、双葉工場で工員として働いていて、みさえは赤ちゃんができてまもなく交通事故で亡くなつて、俺はアパートに住んでいて、一人生きていくのがとても辛くて、地獄のような日々だったよ。』
みさえは黙って俺の話聞いてくれた。

話終わり少し経った後、みさえは口を開いた。

『貴方。貴方には私がいる。しんのすけがいる。ひまわりがいる。貴方は一人なんかじゃない。』

みさえの言葉に俺は不覚にも泣きそうになってしまった。

『ああ、そうだよな。ごめん、心配を掛けた。』

俺には、俺を支えてくれる妻がいる。

子供がいる。

俺には幸せな家庭があるのだから。

『最近、同じ夢を見るんだ。とても嬉しい夢だった。夢の中の俺は、昔働いていた双葉商事に係長として働いていて、みさえのほかに息子のしんのすけと娘のひまわりがいて、俺は、みさえと話していたマイホームに、俺とみさえとしんのすけとひまわりと4人で住んでいて、家族と生きる時間はとても幸せで、毎日が輝いて見えたよ。』

みさえは何も答えてはくれない。

何故ならこの世にはもういないのだから。

話終えた俺は泣き崩れ、しばらくそのままだった。

就寝の時間になった。

俺は今日も同じ夢を見るのだろう。

夢の中の俺の人生は、とても辛くて苦しいものだけど、現実の俺には家族がいる。一家の大黒柱だ。

いつまでも夢に怯えるわけにはいかない。

夢は、夢でしかないのだから。

就寝の時間になった。

俺は今日も同じ夢を見るのだろう。

夢の中の俺の人生は、とても幸せで明るい未来が待っているけど、現実の俺にはなにもない…

いつまでも、夢の中で生きていたい。

こんな現実なんて嫌だ！

なあ…神様…頼むよ…!!

夢の中の俺が現実で…俺の存在は、野原ひろしの見た夢であってくれ…!!